
神様のバカヤロウ

榎マキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様のバカヤロウ

【Nコード】

N3691G

【作者名】

椰マキ

【あらすじ】

先祖代々続く歴史ある神社を受け継いだ神主は神社の運営の危機に日々悩んでいた。一方、受験を連続で失敗した悩める苦学生は劣等感と未だ続く思春期の苦い思いなど諸々の憂鬱を悶々と過ごすのであった。

1 (前書き)

これが初めて書く小説です。拙い文章ばかりか、システムを理解出来ていなく、段落やその他諸々お見苦しい所があると存じますが、よろしくお願い致します。

四月。冬の名残を残す北からの冷えた風に身を震わせて、夜の闇が朝日を伴い霧散していく様子を、この街が一望できる丘の上に建つ古い神社から『神代雄大』は眺めていた。

彼のいる『神代神社』は山を切り開いて作られているため仕方がないのかもしれないが、長い参道の脇には樹齢を誇るかのようにびっしりと背の高い樹木が立ち並び、日中でも日の光が射し込まず不気味と感じる人も多い。付け加えて不気味な参道を越えると急勾配で上り辛い石段が五百段も続くのだ。そんなこんなで、この神社には平日休日問わず人が来ることは少ない。地元の人達でさえこの神代神社主催でおこなわれる祭りの時期以外は敬遠している有り様だ。

この神社はだっ広い敷地のわりには神主一人、巫女二人という厳しい状態で運営している。

各所の清掃だけでも手一杯なうえに、参拝客も少なく、お賽銭などの収入は期待できない状況で、主な収入源としていた地鎮祭や成人式などその他諸々の神事はこの街の近代化とともに廃れていき、江戸時代初期から七代に亘って続いているこの神社は七代目当主である神代雄大の代になって最大の危機に面しているのである。

早朝。神社の広大な敷地の一画に作った畑で神代雄大は土壌を気にしながらキャベツと長葱を収穫していた。

「神に仕える身でありながらも、金銭無くては生活もままならない。世知辛い世の中よな」もう、何万回も言っている彼の口癖だ。彼の伴侶は二人目の娘を出産後、程なく亡くなった。今は、この神社を

二人の娘と雄大の三人で切り盛りしている。年中暇な神社といえ、娘達はまだ学生である。上の娘は高校三年生で今年は大学受験で大忙し。下の娘は今年高校に進学したばかりだ。長女の友香里は成績優秀で学校の生徒会役員までこなしている身でありながら大学進学などせずに家の手伝いをすると言いついし、彼女が物心ついた頃から家業を手伝ってくれている事に罪悪感に似た感情があった雄大は半年に亘って彼女を説得し、ようやく進学の決意を固めてくれたのだ。次女の朱莉も前へならえ！ といった感じで姉と同じく高校卒業と同時に家の手伝いをすると言いつている。二人とも年頃なのに、学校が終われば即帰宅し、家を手伝ってくれるという状況は雄大にとって嬉しくもあるが、最愛の娘達に負担を掛けている心苦しさでいっぱいなのだ。しかし、それだけならば、まだ良かったのかもしれない。裕福ではないけれど親子三人で支え合って幸せにやっていたのだから……。

山城拓弥は浪人生だ。今年で二年目の浪人生活が決定した。親からの仕送りなどは期待できるはずも無く、バイト先の大手ファーストフードチェーン店も、長らく続く不況の影響を受けて人員削減を余儀なくされ解雇された。

「…ククク。神様のバカヤロー…」受験の失敗のショックから立ち直れていない拓弥はうな垂れて、出てくるのは生気の抜けた自身の気持ち悪い笑いを含んだ声だけだ。神様を「馬鹿野郎」呼ばわりする彼にも、心が落ち着く場所があった。何の因果か彼曰く「馬鹿野郎」の住処である神社から一望する街の景色だ。

「こんな地方都市に来て散々な目にあったけど、この景色だけで全て帳消しにできるな」と彼は呟く。夜闇を薙ぎ払いながら朝日が昇る瞬間もいいが、太陽の光が闇に溶けていき、ここからでは小さくぼやけてしか見えない住宅街からの一つ一つの明かりが太陽の光よりも彼には暖かく眩しい。今年、十代最後の年を迎える彼だが、大

学受験というのは単なる行事でしかなく、興味も、その先にある未来など見えるはずもなく、普段は神様なんて意識しない人々が「なんとなく」孫や子供を連れて七五三に出かけて拍手をうつ程度の通過儀礼みたいなものでしかない。だが彼にはもう少し強い思いが誰かに背を押されるかのように確かにあった。

拓弥は朝五時に起きて実家の兄から送られてきた野菜を器用に調理し空腹を満たすと、先月から習慣としている神社へ朝日を見るために足を向ける。

幸か不幸か、彼には勉強時間＝成績という観念はないらしい。優等生であれば格好良く聞こえるかもしれないが、現在二浪中である彼の中では、バイト解雇。受験は不合格。この事実を受け止めるだけでも精一杯で、大学合格と家賃と一日三食。いや：一食。それ以外の事は瑣末な事として処理されているのである。

彼の実家は地元では歴史ある有数の所謂名家である。

厳格な両親の元で育てられた彼は、三歳年上の兄である山城拓馬にいつも劣等感を感じていた。すべてにおいて自分の敵う余地の無い兄は人間らしさを他人には見せる事はなく、それは両親に対しても例外ではなかった。唯一の例外といえば拓弥にだけは違っていた。

幼い頃から拓弥の面倒をよく見てくれたし、学校の宿題やTVゲームなど何にでも積極的につき合ってくれた。内向的でよく虐められていた拓弥を、普段は大人しい兄は、いじめっ子から昔の漫画に出てくるガキ大将よろしく罵倒と供に拳で守ってくれた。それは年を重ねても変わる事はなく、拓弥が高校受験を迎えた年、兄は三日ほど無断で家を空ける事があった。

両親の期待を一身に享ける兄が家が無断で三日も家を空けたのだ。両親は大騒ぎで警察への搜索願を出そうとした時、兄はいつもと変わらない無表情で帰って来た。父親に殴り飛ばされ、母親には泣かれ、小さくなっている兄を始めてみた拓弥は常日頃抱いていた劣等

感がスツと落ち着くのを感じながら唇の端を吊り上げていた。

その夜、兄が部屋を訪ねてきて普段誰にもみせないような表情で、気恥ずかしそうに笑って小さな紙封筒を拓弥に渡してきた。怪訝な表情で拓弥が封を切ると小さな『神代神社』と書かれたお守りが鈴の音と視界を滲ませる何かと供に手のひらに落ちた。

と、そこまで記憶の世界に入り込んでいた拓弥は首をぶるぶると振り、受験失敗やバイトをクビにされたなど、諸々の負の感情を振り払い実家を飛び出した経緯や、彼女いない歴〓年齢などの切ない記憶を封印し

「ま、ま、前向きに生きると決めたんだ。まあ、な、なるようになるさ」と独り呟き手垢で汚れたお守りを握り締めた。

1（後書き）

自分の妄想を人様にお見せするなどという、暴挙にでた私ですが、自分の考える数十%も出せない自分の語学力に絶望するしだいです。ですが自身の向上を目指し努力したいと思います。皆様のご指摘やご意見など、色々のご教授ねがいます。どうかこれからもよろしくお願い致します。

山城拓弥は風呂嫌いである。これは子供の頃からそうで、別にトラウマになるような思い出がある訳ではないし、これといった理由があるわけでもない。気がつけば嫌いになっていた。とはいえ、やはり彼も年頃の少年である。一応、身だしなみも気にするし、異性の視線なども勿論気になる。例えば、一年近くも美容院や理髪店といったところに行かず、髪が伸び放題であるとか、所持している服の数が少なく、洗濯も億劫だからと目立つ汚れが付かない限り数日に亘って同じ服を着用したり。同じ色でさえあれば、ズボンと靴に隠れて目立たないから、と左右バラバラの靴下を履いているとか。そんな彼であっても入浴は欠かせない習慣なのである。

拓弥は近所の銭湯に向かうべく「お風呂セット」を緩慢な動きで準備していた。彼の動きが鈍いのは、なにも彼が天然系のノンビリ屋さんであるとか、徒歩三分の距離にある銭湯に行くのが面倒だとかではない。：後者については多少含まれるが。なにより彼の住むアパートには浴場がない為、入浴するには銭湯に通わなければならない。そんな彼を苦悩させているのは、最近アルバイトを解雇された彼には入浴料三百九十円が負担となりすぎているからだ。

「ちくしょー！ 冷静に考えれば袋入りラーメンが四個も買える値段じゃないか！」思わず恨み言が零れる。

現在彼の主食は、実家の兄から送られてくる大量の野菜だ。季節

にもよるのだが、今月はキャベツと葱だ。現在収入源の無い拓弥には、ありがたい限りだ。もっともアルバイトで収入を得ていた時期であっても節約する必要があったわけで、さすがに野菜ばかりの救援物資で食生活を続けていると、一週間に二度のスーパーの特売日で売られているLサイズパック六個入り百五十円の卵や、袋入りラーメンが食卓に並ぶだけで、たちまち御馳走へと変わるのだ。

月々の家賃は四万円、光熱費その他諸々二万円。合計六万円、その他不意の出費も考慮し、多く見積もって月七万円はこの生活を続けるために絶対に死守しなければならない。そのためには一番削りやすい食費が犠牲となるのだ。

そんな彼をひたすら銭湯に向かわせるのには理由がある。時々番台に居るバイトらしき女の子が気になるわけではなく、時々、出入口で会う「湯上り美人姉妹」と彼が勝手に呼称している人物に会いたいためでは決してない。特に「湯上り美人姉妹」に関しては完全に彼の妄想であって会話すらした事がない。いつも見かける仲の良さそうな二人組みを拓弥が勝手に「姉妹」という設定にしているだけである。

彼が、嫌う風呂に入り続ける理由とは、一日の終わりを自身に実感させ『時間は有限である』と、自身に認識させる。そんな単純な理由だったはずだ。繰り返して言うが、別に、気になる女の子達を見たいとか、不純な動機では決してない。

湯上りの漢。それは即ち腰に手を当ててビン牛乳を一気飲みするのが定説である。そんな定番の衝動に駆られながらも、先立つものが無い拓弥は、ぐっと自制を強いられる。思いの丈を見えない壁に全否定された衝撃でガックリと項垂れて、家路を辿る事となった。

昨晚、妙にたぎった『やる気』に深夜まで参考書を片手に、彼の目には、もはや暗号文にしか見えない数式と格闘していた拓弥は、

薄汚れたカーテンの隙間から差し込む朝日で目を覚ました。気だるそうに首だけを動かし、古ぼけた目覚まし時計を確認すると、午前七時。いつもなら険しい道のりを越えて、昇り行く朝日を眺めて帰って来ているくらいの時間だ。先月、悪天候の日以外は近所の神社から朝日と夕暮れを見ると決めた日課は、あっけなく三十五日目に頓挫したのである。

しかし、今日は以前勤めていたバイト先の給料日。晴れやかな気持ちで一日を迎える拓弥だった。

その日は日中の陽気が嘘のように大雨になった。

「……あの番組、二度と見てやらないんだから！」何やら憤っているのは神代友香里という少女だ。

彼女が毎朝欠かさずに見ている情報番組では「今日は一日良い天気でしょう」といつていたし、その後の星座占いのコーナーでも彼女の「おうし座」は運勢の良さで一位だったはずだ。

「…ッ！ なにが『ラッキーアイテムは新しい靴か新しい下着』だよ！ どうすんのよッこれ！ 傘なんて持ってきてないっての！！！」

四月になり、新学期を迎えたこの時期。生徒会の仕事のために帰宅時間が遅くなった友香里は、誰もいなくなった昇降口で悪態をつきながらも足止めされていた。しかも今から頼まれていた買い物をするため、ここから徒歩十分ほどかかる駅前まで行かなければならない。

「どうしろってのよ！」やり場の無い苛立ちで彼女は腕組みをしながら、何かを踏み潰すかのように踵を地面に叩きつけていた。

この光景を普段の彼女を知る者が見れば衝撃を受けるであろう。なぜならば普段の彼女は、成績優秀、品行方正で奥ゆかしい大和撫子として通っている。その上、生徒会役員として風紀委員まで務めているのだ。

腰まで伸びた艶のある黒髪、どこか勝気で幼さの残る小さな顔、小柄で細い体つきで、一部の生徒からは絶大な人気を誇る彼女だが、周りに人がいないと「地」が出てくるのであった。

そのギャップの激しさを彼女の妹や父親をはじめ、数名の友人達から指摘されていて、なまじ男子達からの熱い視線に自覚があるから余計に性質が悪い。

恨めしげな面持ちで、おろしたての真新しい靴と、全ての元凶で

ある雨空を交互に睨みつけ、何やら思案していた友香里だが、やがて意を決したように「うわあああッ！」と奇声に近い叫び声をあげ全速力で校庭を駆け抜けた。

大雨による足元の悪さからか、どこかに違和感を感じながらも疾走を続けていた友香里が辿り着いたのは一件のファーストフード店の軒先。

ずぶ濡れになった今となっては、もはや無駄な行為かもしれないが広い軒下で雨宿りすることにしたのだ。

ここの所暖かくなってきたとはいえ、まだ四月だ、雨に濡れて冷えた体には震えが走り、思わず「寒い」と零していた。

そんな友香里の声に応じるように一人の少年が躊躇いがちに声を掛けてきた。

どこか見覚えのある彼の姿だが、はつきりと思い出せない。ただでさえ、雨に濡れて寒いし、その上、買い物も終えなければならぬ彼女には余裕がない。今は用事を早く終え、温かいお風呂に入るのが彼女の最優先事項なのだから。

雨が地面を打ちつける音に紛れて少年がボソボソと何かこちらに向かって言っているが、はつきりと聞き取れない。はじめは「ナンパ」かと思っていた友香里だがどうやら違うらしい、彼との距離も離れているし、何やら遠慮がちな仕草から、道でも尋ねているのかと思った友香里は自分から改めて声を掛けてみる事にした。

「なにかお困りですか？」友香里が言うと、彼は少し困った表情を作り俯いてしまった。何やら聞き取れない位の小さな声でボソボソと言っている彼に、内心少し苛々していた友香里が怪訝な表情を作ると、彼は再び困ったような表情で言った。

「……その、す、スカートが…あの…」辛うじて聞き取れた彼の声

はそんな言葉を言っている。

（なんだ？スカート？やっぱりナンパか？変態さんなのか？）そう考えた友香里は気味悪くなり立ち去ろうとするが、次に彼から発せられた言葉が彼女の足を止めた。

「まって！ その、……引っかかってるよ」なにやら、こちらを指差しそんな事を言ってくる彼に、

「…は？」苛立ちを隠さず彼女は言っ続けた。

「あんたの下手なナンパにひっかかってるっていうの？ バカじゃないの？」と彼女は一際大きな声で言う。

彼女の大きな声に通行人が一斉に彼女達に視線を向ける。その視線を受けて彼はますます挙動不審になったが、さきほどから不運続きの彼女は鬱憤を晴らすかのごとく、目の前の不審者に向けて言葉を続ける。

「あんたみたいな根暗そうな奴に引っかかる女の子なんていないっての！ そもそもなに？ スカートって？ 売ってほしいの？ あんた、そんな事言ってて恥ずかしいの？」つい勢いで言ってしまうって、少し言い過ぎたと反省するも、続いた彼の言葉が友香里の思考を遮った。

「ひ、人が親切で言っやってるのになんだよ！ 君の鞆がスカートのめくり上げてて、パンツ丸見え状態だから、気づいて無いのかと思って教えてやろうと思ったんだけど、要らないお世話だったかな？ パンツ丸見えで喜んでいる露出狂の変態さんですか？ 無粋な真似しちゃってごめんね！」

と、気弱そうに見えた少年が、大きな声で一気に捲くし立てると、彼はその場を走り去ってしまった。唾然とする友香里は改めて自分の姿を確認する。肩から下げた鞆に取り付けていたキーホルダーが、

制服のスカートの裾に絡まり下着がモロに見えている。友香里はそっと周りへと目をやる、恥ずかしそうに顔を赤くしている学生やサラリーマン達がこちらを見ている事に気づくと、雨に濡れた体を更に冷たくさせて、神代友香里は買い物の事などすっかり忘れて奇声を上げ、泣きながらその場を走り去るのであった。

「散々な目にあった」

と、山城拓弥は、昨日の出来事を思い返していた。

確かに、女の子の下着を見てドキドキしただろ？と、問われれば素直に認めるしかない。

だがしかし、拓弥には納得がいかなかった。

彼としては、あの状況を放置していても問題なかった。

しかし、そのままだと彼女が不憫だと思い勇気を振り絞り、注意しようと思ったら「変態、バカ、根暗」などの罵詈雑言が返ってきたのである。

まことに遺憾だ。と、彼は思う。

それだけならば、まだ良かったのかもしれない。

彼女とのやりとりで彼女が露出狂の変態である線は薄れた。だが拓弥はショックを受けていた。それはなぜか？

それは、こともあろうか、彼女は拓弥が「湯上り美人姉妹」と名付け密かに憧れていた「姉妹」の「妹」の方であるからだ。

奥ゆかしい美人姉妹「妹」の正体が、あんな粗暴な振る舞いをする娘であったとは、さすがに絶望するしかない。

色々な事が思考を巡るが、彼の懸念は他にある。

もし、この先も変態扱いされたままでは、これから近所の銭湯で顔を合やす事も気まづくなる。

それだけならまだいい。

もし彼女に出会うなり「こいつ変態です」と騒がれてしまつては、この近辺で唯一の銭湯が立ち入り禁止になってしまうのではないかと、拓弥は懸念し頭を抱える。

「……なんとしても、変態の汚名を払拭しなければ」と意気込みを

見せるが、次の瞬間には、拓弥の思考がマイナスな方向へと変わる。一瞬にして、どんよりとした表情になった拓弥だったが、やがて何かを思いついたように目を見開いた。

「……そ、そうだ。……ククッそうだよ。僕だとわからないようにすればいいんじゃないか？ どうせ、時々銭湯で会う程度だ。それに、その時々でさえも、彼女達は僕なんか見てなかったかもしれない。外見さえ変えてしまえば面倒な事は避けられる……」

思い立った拓弥は妙なテンションのまま勢い良く部屋を出た。

拓弥が向かったのはアパートの一画。このアパートの管理人が住む部屋だ。

「……よしっ」拓弥は躊躇いがちにドアをノックする。

「はーい。どなたですか？」

聞こえてくるのは若い女性の声だ。

「あ、おはようございます。山城ですが、管理人さんをお願いがありません……」

ちよつと待ってね。という声の後に続いてドアが開いた。

「今日も相変わらずだねー。タクやん」そんな声と同時にひよっこりと管理人さんが姿を見せる。

「……あ、相変わらずって、どんなのですか！ あとタクやんってのやめてください！」ムツとなって反抗の言葉を口にする拓弥だが、それが当然と言わんばかりにスルーされる。

どうぞ。というような所作で彼女は拓弥を部屋に招き入れると、そこに座れ。といった感じでテーブルを指差す。

彼女の名前は「佐田優希」年の頃は二十代中頃といった感じで、スラッとした長身、豊かな胸元、ぱっちりとした大きな目元、化粧気のない顔は童顔で、美人というよりは可愛いといった感じの顔立ちだ。まさに申し分のない見事なスペックといえるが、何故か年中ジャージ姿である。それも学校指定のような何の飾り気もない青い

ジャージ。その上、肩口まで伸びた髪は痛みきっていて、それを適当に後ろで束ねているといった感じた。

そんな彼女は拓弥を見つけると、逆セクハラ上司のように妙に色っぽい仕草で彼をからかい、あたふたする拓弥の挙動不審振りを見て満足するといった悪趣味を持つ。故に、拓弥としては彼女の悪趣味を苦手としていているのだが、どこか面倒見のいいお姉さんといった感じで拓弥にとっては話しやすく、時々話を聞いてもらったりもしている。

彼女は拓弥を部屋に通すと、台所でなにやら忙しそうにしている。「すみません、お忙しいところにお邪魔して」申し訳なさそうに拓弥が言うと、

「いやーいいよ。今日ね、両親が久しぶりに帰ってくるからさ、料理でもしてみようかと思ったんだけど。慣れないことはするもんじやないね」そう言う彼女は苦笑いしながら頭を掻いている。

「で、タクやん。お願いって何？ ……ハッ……まさか」と、ニヤケ顔で胸元を両腕で隠すような仕草をする。

「っち、違います！」

顔を赤くさせて、やり場に困った視線を漂わせながら拓弥は否定する。

拓弥の動揺する様に気を良くした彼女は満足気に大きくウンウンと頷く。

「ごめんごめん。で、本題は？」ニヤケ顔を必死に隠そうとしているが、目が笑ったままの彼女が言った。

「いや、あのですね。バリカンってもってましたよね？ あれを貸して頂きたいのですが」

「……ん？ 急にどうした？ タクやん」ニヤニヤ顔がいつの間にか復活した彼女が目を輝かせて続ける。

「うーん、なるほど！ わかったよ。わかったような気がした！ みなまで言うなタクやん。失恋の傷をお姉さんに癒してほしいんだ

ね!」と、言う。「さあ、飛び込んでおいで」といった感じで彼女は両手を大げさに広げる。

いいかげん、本当に飛び込んでやろうか。

そう思った拓弥だったが、実際そんな事する度胸があるわけもなく、それを知ってる彼女に、いいようにからかわれているだけだ。これ以上の事態の悪化を防ぐべく、挙動不審になりながらも先を続けた。

拓弥は先日のお出来事や、近所の銭湯で時々見かける事、姉妹などと勝手に決めているが自分の妄想である、などと全ての詳細を話すと、優希はフムフムといった感じで相槌をうつ。

「で、結局。タクやんはその子の誤解を解きたいの? それとも、」
彼女がそこまで言ったところで拓弥が遮った。

「いや、もう答えは出てるんです。面倒なのはごめんです。……だから坊主頭にして、目に付かないように外見を変えれば、それでもうこの話は終わるんです」

その拓弥の言葉をうけて、優希は「はあ」と溜め息をつき、「あのね」と彼女は続ける。

「確かにさ、面倒かもしれないけどね。もしも、その子が自分の勘違いだと分かってタクやんに謝りたいとか思ってたらどうすんの?」

「……どうもしないですよ。さっきも言いましたけど、元々彼女とは知り合いでもなんでもないです。……ただ銭湯で見かけるだけでそれに、彼女達も僕の事なんて見てなかっただろうし。……とにかく、僕が頭を丸めれば、それだけで全てうまくいくんです」

そんな拓弥の言葉を「ふーん」と気の抜けた生返事で返して優希は腕時計に目を向ける。

「あ、そうだ。タクやん」何かを思い出したかのように彼女は切り出した。

「バイト探してたよね? もう見つかった?」

「いや、まったく。……あ、家賃のほうは大丈夫です、……今月は、

「なんとなりましたから」

彼女は少しニヤツと笑って拓弥を見ると、しばらく何やら考えた後にこう言った。

「タクヤン！ バイトならあるよ。知人が人手不足で困っててさ。タクヤンさえ良ければ直ぐにでも紹介できるけど」

彼女の言葉に拓弥は思わず身を乗り出した。

「……なんと！ どんなバイトですか？ い、いや、この際贅沢はいいません。なんでもやりますです。是非、是非、紹介していただきたい」

必死に訴える拓弥の様子が気に入ったのか、優希は無邪気な笑顔をみせると、

「お、いいね。やる気のある若者は好きだぞ。ご褒美にお姉さんが……」彼女がそこまで言った時、その後にくく不穏な言葉を遮るように、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3691g/>

神様のバカヤロウ

2010年10月28日08時43分発行